東京女子医科大学病院
病院案内

令和7年度版(2025～2026)

HOSPITAL GUIDE

TOKYO WOMEN'S MEDICAL UNIVERSITY HOSPITAL

ごあいさつ

病院長 **西村 勝治**

令和6年12月6日付で病院長に任命されました、西村勝治（にしむら かつじ）と申します。専門は精神医学です。

このたび、当院は「新生 東京女子医科大学病院」として、新たなスタートを切りました。多くの皆さまにご心配とご迷惑をおかけしましたこと、深くお詫び申し上げます。今回、法人の体制が刷新され、病院も新たな一歩を踏み出しました。今、私たちは過去を乗り越え、再び社会から信頼される病院を築く責任を胸に歩み始めています。この責任を果たすために、病院のすべての職員と共に、基本理念と基本方針を見直すことから始めました。東京女子医科大学の創立理念である「至誠と愛」の精神に立ち返り、私たちの使命、目指す病院像、そして大切にすべき価値観を再確認しました（「新生 東京女子医科大学病院のミッション、ビジョン、バリュー」）。これらの理念を基盤に、私たちは一丸となって共通の方向に向かって邁進してまいります。

私たちの使命は、社会から信頼される高度な医療を提供する大学病院として、すべての人々の生命と健康を守ることです。これを実現するために、高水準の医療安全と最新の医療技術を追求し、患者さん一人ひとりに最善の医療を提供することを目指します。また、すべての職員が医療人としての誇りと責任を持ち、患者さんやそのご家族と共に成長し続けることを強く決意しています。

今後とも、当院の再生を温かく見守り、ご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

新生 東京女子医科大学病院のミッション、ビジョン、バリュー

ミッション(Mission)～病院の使命～

社会から信頼される高度な医療を提供する大学病院として、人々の生命と健康を守ります。

ビジョン(Vision)～目指す病院像～

高水準の医療安全と最新の医療を追求し、患者さん一人ひとりに最善の医療を実践することを目指します。

バリュー(Value)～行動指針～

1. 人間中心(Human-Centered)
本学の理念である「至誠と愛」に立ち戻り、患者さんの利益を最優先に考え、安心・安全な医療を提供します。同時に、人材の育成を重視し、やりがいと誇りを持って働くことができる職場風土を醸成します。

2. 高潔(Integrity)
患者さんとご家族、職員、そして社会に対して高潔な志を貫きます。過去の過ちを決して忘れず、強いガバナンスと透明性のある運営を実現します。

3. 責任(Responsibility)
職員一人ひとりが考え、行動し、患者さんの生命と健康を守る責任を全うします。また、すべての職員がともに組織の改善に継続的に取り組みます。

4. 共創(Co-Creation)
職種を超えてすべての職員が一丸となり、患者さんとご家族とともに、最善の医療を実践することを目指します。

5. 革新(Innovation)
新しいアイデアやアプローチに対して開かれた姿勢を持ち続けます。最新の医療技術とケアを追求し、常に医療の質の向上を目指します。

当院の機能と役割

1. 当院は急性期医療の病院です
当院は、診療所及び病院などからの紹介で、大学病院の入院治療が必要な方を積極的に受け入れる病院です。

2. 病状安定後は退院・転院をお願いしています
高度急性期の治療を必要としている方に適切に対応するために、当院での高度急性期治療が終わった患者さんは、退院して在宅や紹介元や地域の病院への転院をしていただきます。

3. 地域の医療機関と連携を図っています
当院は、地域の病院や診療所、かかりつけの先生方と密接な医療連携を結び、切れ目のない医療の提供を実践しております。退院や転院については、当院の医師や看護師および医療連携・入退院支援部にご相談ください。

東京女子医科大学病院 患者さんの権利と責務

患者さんの権利

1. 良質な医療を受ける権利
身体的、言語的、文化的違いに関わらず、平等に良質な医療を受けることができます。

2. 選択の自由の権利
納得して治療をうけられるよう、他施設の医師に意見(セカンドオピニオン)を求めることができます。

3. 自己決定の権利
十分な説明と情報提供を受けたうえで、検査、治療、手術などを自らの意思で決めることができます。

4. 情報に対する権利
病状、検査、治療、手術、見通しなどについて、理解しやすい言葉や方法で、納得できるまで説明を受けることができます。
また、ご自身の診療記録の情報開示を求めることができます。

5. 守秘義務に対する権利
プライバシーは尊重され、個人情報は保護されます。

6. 健康教育を受ける権利
疾病の予防および早期発見などの健康教育を受けることができます。

7. 尊厳に対する権利
だれもが、一人の人間として、いかなる状況においてもその人格や価値観が尊重されます。

8. 宗教的支援に対する権利
精神的および宗教的な慣習について配慮を受けることができます。

患者さんの責務

1. 情報の提供
良質な医療を実現するために、ご自身の健康に関する情報をできる限り正確にお伝えください。 誤認防止のために、氏名(フルネーム)および生年月日をお伝えください。

2. 規則の順守
快適な環境で医療をうけられるよう、社会的ルールを遵守し、病院内の規則や病院職員の指示を守ってください。

3. 迷惑行為の禁止
病院職員に対し、暴力、暴言、セクハラ、診療の妨げとなる行為はお控えください。(遵守いただけない場合は、当院での診療をお断りさせていただく場合があります)

4. 医療行為への参加
医療は医療者との協同行為ですので、医療に参加し協力してください。ご自身の病気や治療で不安や疑問があればお伝えください。

5. 教育への協力
当院は教育・研究機関です。医学生や看護学生などの研修・実習・見学にご理解、ご協力ください。(学生の参加にご賛同いただけない場合は、職員までお申し出ください)

CONTENTS

東京女子医科大学病院 患者さんの権利と責務……4
沿　革……5
概　況……6
病院組織図……7
診療部門紹介……8
外来案内……25
病棟案内……26
構内見取図……27

沿革

明治	明治33年(1900年)12月	東京女醫学校創設(5日:創立記念日)
	明治37年(1904年)7月	私立東京女醫学校設立認可
	明治37年(1904年)9月	東京至誠医院設置
	明治41年(1908年)12月	附属病院開設許可
	明治45年(1912年)3月	私立東京女子医学専門学校設立認可
大正		
昭和	昭和5年(1930年)12月	附属病院竣工
	昭和11年(1936年)10月	第二病棟竣工
	昭和27年(1952年)4月	新制東京女子医科大学発足
	昭和30年(1955年)5月	附属日本心臓血圧研究所(のち心臓病センターと改称)設置
	昭和40年(1965年)4月	附属日本心臓血圧研究所(のち心臓病センターと改称)竣工
	昭和40年(1965年)4月	附属消化器病・早期がんセンター(のち消化器病センターと改称)設置
	昭和42年(1967年)10月	神経精神科病棟竣工
	昭和42年(1967年)12月	附属消化器病センター竣工
	昭和46年(1971年)10月	附属脳神経センター竣工
	昭和50年(1975年)7月	糖尿病センター設置
	昭和53年(1978年)3月	中央病棟竣工
	昭和54年(1979年)4月	腎臓病総合医療センター設置
	昭和55年(1980年)7月	東病棟竣工
	昭和59年(1984年)4月	内分泌疾患総合医療センター設置
	昭和59年(1984年)9月	母子総合医療センター設置
	昭和62年(1987年)3月	糖尿病センター竣工
平成	平成元年(1989年)4月	救命救急センター設置
	平成2年(1990年)10月	呼吸器センター設置
	平成15年(2003年)3月	総合外来センター竣工
	平成21年(2009年)12月	第1病棟竣工
	平成28年(2016年)9月	教育・研究棟竣工
令和	令和2年(2020年)2月	彌生記念教育棟、巴研究教育棟竣工

概況

令和7年8月現在
＊内容は、適宜更新します。最新の情報は、病院のホームページをご覧ください。http://www.twmu.ac.jp/into-twmu/

開設者	学校法人　東京女子医科大学
病院長	西村　勝治
副院長	中井　陽介　診療部門／診療支援部門担当（内科系） 高木　敏男　診療部門／診療支援部門担当（外科系） 野村　岳志　医療安全・医療の質・感染部門担当 市原　淳弘　臨床研修教育部門担当 花房　規男　管理部門担当（病院IR） 山口　淳一　診療連携部門担当 明石　定子　労務部門担当 白石　和子　看護部門担当
看護部長	白石　和子
薬剤部長	塩川　満
事務長	丸地　伸
許可病床数	1,139床　（一般：1,112床　精神：27床）
職員数 （令和6年4月現在）	医師　661名 看護師　958名 その他　699名 合計　2,318名
患者数 （1日平均）	外来患者数　入院患者数 令和4年　3,049人　634人 令和5年　2,869人　603人 令和6年　2,736人　583人
機能	●救急告示病院 ●臨床研修指定病院 ●災害拠点病院 ●神経難病医療拠点病院 ●肝臓専門医療機関 ●東京都脳卒中急性期医療機関 ●東京DMAT指定病院 ●東京都難病診療連携拠点病院 ●東京都アレルギー疾患医療専門病院 ●公害医療機関 ●臨床修練指定病院 ●エイズ治療拠点病院 ●治験拠点医療機関 ●移植認定施設（心臓・小児心臓・腎臓・膵臓・肝臓・骨髄・末梢血幹細胞） ●総合周産期母子医療センター ●東京都小児がん診療病院
保険医療機関承認	令和6年10月1日～令和12年9月30日

病院組織図 令和7年8月現在

- 病院長
  - 副院長
  - 事務長
  - 医療安全・医療の質・感染部門
    - 医療安全推進室
      - ハイリスク症例支援室
      - 褥瘡対策室
      - 医療対話推進室
    - 医療の質管理部
    - 総合感染症・感染制御部
  - ベッドコントロール室
  - 医療DX推進室
  - 診療部門
    - 血液内科
    - 神経精神科・心身医療科
    - 小児科
    - 小児外科
    - 整形外科
    - 形成外科
    - 皮膚科
    - 産婦人科
    - 眼科
    - 耳鼻咽喉科
    - 放射線腫瘍科
    - 画像診断・核医学科
    - 麻酔科・ペインクリニック
    - 歯科口腔外科
    - 総合診療科
    - リハビリテーション科
    - 病理診断科
    - 腫瘍内科
    - 睡眠科
    - 医療安全科
    - 感染症科
    - 感染制御科
    - 予防医学科
    - 集中治療科
    - 移植管理科
    - 循環器内科
    - 心臓血管外科
    - 循環器小児・成人先天性心疾患科
    - 消化器内科
    - 消化器・一般外科
    - 消化器内視鏡科
    - 脳神経内科
    - 脳神経外科
    - 腎臓内科
    - 泌尿器科
    - 腎臓小児科
    - 血液浄化療法科
    - 糖尿病・代謝内科
    - 高血圧・内分泌内科
    - 内分泌内科
    - 乳腺外科
    - 内分泌外科
    - 母子総合医療センター
      - 母体・胎児医学科
      - 新生児医学科
    - 呼吸器内科
    - 呼吸器外科
    - 膠原病リウマチ内科
    - 整形外科（リウマチ）
    - 小児リウマチ科
    - ゲノム診療科
    - 救命救急センター
      - 救命・救急医療科
  - がんセンター部門
    - がん研修室
    - がん患者相談室
    - がん登録室
    - がん緩和ケア室
    - 外来化学療法室
    - レジメン審査室
    - がんゲノム診療室
    - 小児がん支援室
  - 健診部門
    - トータルヘルスケア・予防医学センター
  - 看護部門
    - 看護部
  - 診療支援部門
    - 薬剤部
    - 手術部
      - 中央手術室
      - 西病棟手術室
    - 集中治療部
    - 中央放射線部
    - 中央検査部
      - 臨床検査科
    - 輸血・細胞プロセシング部
      - 輸血・細胞プロセシング科
    - リハビリテーション部
    - 臨床工学部
      - 臨床工学科
      - ME機器管理室
    - 栄養管理部
    - 医療材料管理部
      - 物流管理室
    - 中央材料部
      - 中央材料室
    - 医療連携・入退院支援部
      - 入退院支援室
      - 医療福祉相談室
      - 地域連携室
    - 移植支援部
    - 未承認・禁己・適応外医薬品等評価室
    - 未承認等新規高度管理医療機器等評価室
    - 高難度新規医療技術評価室
    - 病院写真室
    - 診療支援チーム
      - RRT
      - 呼吸ケアチーム
      - 栄養サポートチーム
      - 精神科リエゾンチーム
      - 褥瘡対策チーム
      - 認知症ケアチーム
      - 緩和ケアチーム
  - 管理部門
    - 病院事務部
      - 病院企画運営課
      - 医事課
        - 医療情報室
    - 病院機能・情報管理部
      - 遺伝子情報管理室
    - 放射線管理室
    - 放射線治療品質管理室
  - 臨床研修教育部門
    - 卒業臨床研修センター
  - 研究推進部門
    - 研究推進センター
      - 研究推進センター臨床研究管理科

診療部門紹介

血液内科
Department of Hematology

血液内科では、白血病、骨髄異形成症候群、悪性リンパ腫、多発性骨髄腫、真性多血症などの悪性疾患に対して、また種々の貧血や血小板減少症などの良性疾患に対しても、各疾患の専門家を中心としたチームで診療を行っています。通常の化学療法はもちろん、最新の治療法や造血幹細胞移植を積極的に取り入れることにより、患者さん、ご家族の納得のいく治療を提供することを目標としています。また、日本において多発性骨髄腫に対するCAR-T療法を行うことができる数少ない施設の１つです。外来では、常時4人前後の血液内科専門医が診療を行っています。円滑に他科との連携を図ることにより、診断から治療までの期間をなるべく短縮して、安心して治療に臨めるよう努めています。その他、新規薬剤開発にも積極的に取り組んでおり、日本では未承認の薬剤や治療法を使用できる可能性がありますので、お問合せください。

神経精神科
Department of Psychiatry

心の病は国民の健康を脅かす5大疾病のひとつであり、統合失調症、双極症、うつ病、不安症、器質性精神障害などが含まれます。神経精神科は難治性疾患を含む、これら多様な精神障害に対する治療を軽症例から重症例まで幅広く行っています。治療のゴールを病気からの回復と社会参加の促進に置き、現代の精神科医療が到達した最も標準的でバランスの取れた医療の提供を目指しています。具体的にはエビデンスに基づく薬物療法、個別性を重視した心理療法、心理教育、精神科リハビリテーション等からなる包括的なアプローチです。チーム医療を重視し、医師、看護師、公認心理師、作業療法士、薬剤師、精神保健福祉士からなるスタッフが協働して日々の診療にあたっています。また、高度医療を担う大学病院という特性上、コンサルテーション・リエゾンにも力を入れており、がんをはじめとしたさまざまな病気で治療中の患者さんに対して、心のケアを行っています。この活動は精神科リエゾン・チームが中心となって、各診療科と連携して進めています。

小児科
Department of Pediatrics

小児科は、初診時の年齢が主に15歳未満の内科疾患全般を対象とし、全身を診ることができる数少ない診療科の一つです。「子どもは常に成長・発達している」ということが、おとなとの最も大きな違いであることから、常に子どもの成長発達過程に留意した診療を心がけています。外来診療は、原則として、午前中が主に一般外来、午後は、神経、筋、てんかん、アレルギー、発育・発達、内分泌、栄養・消化器などの専門外来としています。但し、緊急性のある疾患については、予約外、時間外来にも積極的な対応を心がけています。
大学病院として、遺伝子治療、分子標的治療などの先端医療を推進する一方、循環器小児科、腎臓小児科、新生児科、小児外科、脳外科小児グループなど小児専門各分野と連携して包括的診療体制を展開しています。

小児外科
Department of Pediatric Surgery

小児は成人のミニチュアではなく、小児医療は高い専門性をもった領域です。小児外科診療科は、都内でも有数の日本小児外科学会の認定施設であり、年間250例以上の小児外科手術を行っています。対象疾患は、出生直後の新生児期から学童期（15歳未満）までの頭頸部・呼吸器・消化器・泌尿生殖器・内分泌臓器・小児腫瘍など、小児にみられる外科的疾患を広い範囲で取り扱っております。15歳以上であっても、先天性疾患の場合は小児外科で対応可能です。先天性の疾患だけでなく、外傷や生後発現する疾患も同じように小児外科指導医・専門医が治療をいたします。特に、日本内視鏡外科学会技術認定取得医（小児外科領域）による腹腔鏡・胸腔鏡を用いた小児内視鏡外科手術や、消化器内視鏡診断・治療には30年以上の実績があり、新生児も含めた多くの疾患に対する診断・治療が低侵襲に行われています。また、小児科、腎臓小児科、循環器小児科、母子総合医療センター新生児部門、脳神経外科（小児グループ）などの、院内小児関連各科との密接な協力体制のもと、小児チーム医療における外科部門の中心的役割を担っています。

整形外科
Department of Orthopedic Surgery

手足、体幹に痛みや機能障害をもたらす骨関節、筋肉、神経などの運動器疾患を治療します。これらの疾患は人口の高齢化に伴い増加し、QOL(クオリティ・オブ・ライフ・生活の質)の低下を招きます。腰痛や関節痛によって、歩くこと、スポーツやレジャーを楽しむこと、労働することなどに不自由を感じている方は増えています。整形外科は全身の運動器すべてを扱うため、当科では、膝関節、股関節、脊椎、肩肘関節、手の外科、足の外科、骨粗鬆症、関節リウマチ、骨軟部腫瘍などの各分野にエキスパートの医師がおり、一般的な疾患はもちろん、難治疾患などにも対応しています。例えば変形性関節症に対する人工関節置換術や骨切り術、半月板や靱帯損傷に対する関節鏡視下手術、脊椎変性疾患に対する減圧矯正固定術、脊椎内視鏡手術、肩関節疾患に対する関節鏡視下手術や人工関節置換術、上肢の外傷や神経軟部疾患に対する手術、リウマチによる手足変形の手術などを多数行っています。専門外来の受診には混雑が予想されますのでお近くの医療機関からの紹介状をお持ちください。また、受診の際には必ず予約をお取り下さい。

形成外科
Department of Plastic and Reconstructive Surgery

形成外科とは、体表外科ともいわれるほど体の表面すべてに携わる外科です。口唇、口蓋裂、指趾の変形(多指〔趾〕・合指〔趾〕症)漏斗胸などの先天異常の治療や、種々の「あざ」や「しみ」に対するレーザー治療、指切断に対するマイクロサージャリーを用いた再接着術、乳房再建などがん切除後の再建術、そして重症から軽症までのやけどの治療を行っています。ケガによるキズやキズ跡をきれいにするために、最新の医療技術にも取り組んでいます。最近では瞼(まぶた)のたるみや下垂を治したりする眼瞼下垂や、レーザーや美容外科手術などのいわゆる「若返り治療」も盛んに行われております。

皮膚科
Department of Dermatology

皮膚科では午前中にあらゆる皮膚疾患(湿疹、水虫、イボ、皮膚がんなど)の初診および再診患者さんを診療しています。初診はなるべく紹介状をご持参いただきたいと思いますが、紹介状なしでも診察しています。午後はパッチテスト、乾癬、蕁麻疹、膠原病、アトピー性皮膚炎、水疱症、レーザー治療(しみ、あざ、ほくろ)、小手術(小腫瘍)などの専門外来も開設しています。その他、皮膚生検(皮膚病の一部を小さく切除して組織検査を行うこと)が必要な場合は火曜日と木曜日の午後に行っています。専門外来や皮膚生検・手術外来の受診は、一度午前中の一般外来を受診していただいてから、ご予約をお取りする形で行っています。
難治な皮膚病からニキビやシミなどの美容的な問題まで幅広く診療しており、常に新しい治療薬剤・技術の導入を心掛けています。

産婦人科
Department of Obstetrics and Gynecology

産婦人科の分野は腫瘍、周産期、生殖、女性医学の4つの分野に分かれます。当教室では、それぞれの分野の教授がそろい、先進的な診療を行っています。近年、分娩年齢の高年齢化と悪性腫瘍発症年齢の若年化により、未婚の悪性腫瘍患者や悪性腫瘍合併妊婦が増えています。例えば、悪性腫瘍を患った妊婦を母児共に救命するには、がん治療はもちろんのこと、周産期やNICUだけでなく生殖医療の先進的な技術が必要です。我々はこれまで合併症妊娠などに対する豊富な周産期診療の経験を有し、生殖内分泌の技術に加え、腹腔鏡の専門医も多数在籍しています。今後は、生殖機能を温存したがん治療を教室の柱として、周産期、生殖、腫瘍の専門医がチーム一丸となって、診療に取り組んでまいります。

眼科
Department of Ophthalmology

患者さん一人一人により良い視機能(クオリティ・オブ・ヴィジョン:QOV)を提供できるように、当科では各々の患者さんに最も適した眼科診療を行っています。外来診療では一般眼科診療の他に、黄斑・網膜・硝子体、角膜、ドライアイ、涙器疾患、緑内障、ぶどう膜炎、神経眼科、斜視弱視、未熟児、小児眼科、色覚、ロービジョンなどの各専門分野で、診断機器と治療装置を備えて、特徴ある治療で実績を積み重ねています。特に、失明につながる加齢黄斑変性などの黄斑疾患の治療に力を入れており、「黄斑疾患総合ケアユニット」で専門性の高い診療を総合的に行っております。また、白内障、網膜剥離や黄斑疾患などの網膜硝子体疾患をはじめ、様々な疾患に対して、視機能の回復を目指して、患者さんにとってより良い手術を積極的に行っています。

耳鼻咽喉科・頭頸部外科
Department of Otorhinolaryngology - Head and Neck Surgery

耳鼻咽喉科では、鎖骨から上の「頭頸部」領域のうち、脳と眼球を除く広い範囲を扱います。耳や鼻、咽喉（のど）の疾患に加えて、聴覚・平衡覚・嗅覚・味覚といった感覚機能の異常、顔面神経麻痺、咽喉頭の疾患、摂食・嚥下障害、発声の問題、唾液腺疾患、さらには頭頸部に発生する良性・悪性腫瘍の診断と治療を行っています。
中耳疾患に対する鼓室形成術やアブミ骨手術、鼻副鼻腔疾患に対する内視鏡下鼻内手術など、多くの専門的な手術も実施しています。また、喘息との合併が多い好酸球性中耳炎や好酸球性副鼻腔炎に対しては、当院の呼吸器センターと密接に連携し、上気道から下気道までを包括したトータルな気道管理を行っています。これにより、手術を含めた治療成績の向上が得られています。
さらに、専門外来として補聴器相談、口腔乾燥・味覚障害外来、頭頸部腫瘍外来を設け、疾患の治療だけでなくQOL（クオリティ・オブ・ライフ）の改善にも力を入れた診療を目指しています。

放射線腫瘍科
Department of Radiation Oncology

放射線腫瘍科では、年間およそ700名の患者さんに放射線治療を行っており、がんを中心とした悪性腫瘍はもちろん、ケロイドなどの良性疾患にも対応しています。
当科には、最新の高精度リニアック（すべてにコーンビームCTを搭載）2台のほか、腔内・組織内照射に対応したイリジウムリモートアフターローディングシステムや、X線撮影とCTが一体となった位置決め装置など、充実した設備を備えています。これらを用いることで、患者さん一人ひとりに合わせた精密で安全な放射線治療を実現しています。
とくに、肺がんや肝がんに対する体幹部定位放射線治療（SBRT）、脳腫瘍や前立腺がん、食道がん、頭頸部がん、直腸がん、子宮頸がんなどに対する強度変調放射線治療（IMRT）や画像誘導放射線治療（IGRT）を積極的に行っており、高い治療効果と副作用の軽減を両立させています。
私たちの特徴のひとつは、神経膠腫や小児の脳腫瘍の患者さんを多く受け入れていることです。また、前立腺がんに対しては、短期間で治療を終える寡分割照射やSBRTなど複数の選択肢を用意し、乳がん対しても体表面照合型IGRTを用いた先進的な照射法を導入しています。
診療には、医学物理士や診療放射線技師、放射線治療専門看護師をはじめとする専門スタッフがチームで関わり、治療の精度と安全性を保つために厳格な品質管理体制を整えています。
最先端の技術と確かな知識、そして患者さんに寄り添う姿勢で、「ここで治療を受けてよかった」と思っていただけるような放射線治療を目指しています。

画像診断・核医学科
Department of Diagnostic Imaging and Nuclear Medicine

画像診断・核医学科は、従来の放射線科業務の3本柱である、画像診断、核医学、放射線治療の中の、画像診断と核医学を受け持つ診療科です。画像診断では、単純X線撮影 マンモグラフィー、CT、MRIの読影や、超音波や血管撮影の検査および診断を行っています。また、CTや超音波検査を用いた細胞診や組織診とドレナージに加え、血管内治療などのインターベンショナルラジオロジー（IVR）も担当しています。核医学では、昔から広く行われている骨シンチ、ガリウムシンチなどの一般核医学から、SPECTによる心臓や脳神経の機能診断PETを用いた分子イメージングを担当しています。最近では認知症の検査としてアミロイドPETも多く行っています。さらに放射性同位元素（RI）を用いた治療では、ヨード（1-131）によるバセドウ病や甲状腺がんの治療、塩化ラジウム（Ra-223）による骨転移治療、ゼバリン（Y-90）による悪性リンパ腫の治療、ならびにLu-177を用いた神経内分泌腫瘍の治療を各診療科と連携して行っています。以上のような業務に対し、診療放射線技師や看護師とも連携し、チーム医療を実践し、専門性が高くかつ安全な医療の実現に努めております。

麻酔科・ペインクリニック
Department of Anesthesiology

麻酔科は、最先端の医療技術で安全かつ快適な外科治療を支える診療科です。私たちは、手術中の全身管理はもちろん、手術前後の評価とリスク管理を含めた「周麻酔期医療」により、患者さんの状態やご希望に応じた、個別化された医療を提供しています。さらに、麻酔科ならではの専門性を活かし、ペインクリニックでは慢性疼痛、病棟ではがんに伴う痛みや不安、産科では無痛（麻酔）分娩やハイリスク出産の麻酔管理など、手術室の枠を超え、幅広い分野で痛みの治療に貢献しています。
当院では、麻酔科専門医・研修医や手術室看護師に加え、麻酔科診療看護師、周術期専属薬剤師、手術室専属エンジニアなど、多職種チームで周麻酔期医療を支えています。私たちは、単に「眠らせる」だけでなく、痛みや不安に寄り添い、患者さんの治療全体を支えるプロフェッショナルを目指しています。

歯科口腔外科
Department of Oral and Maxillofacial Surgery

歯科口腔外科では、歯、口、顎骨の疾患の診断と治療を行っております。親知らず(智歯)、口腔がん、顎変形症(骨格的な不正咬合)、顎骨のう胞・腫瘍、歯が原因の炎症、口内炎などの口腔粘膜疾患、歯科インプラント治療、顎関節症、顎関節疾患(脱臼、強直症)、歯や口の中の外傷、顎の骨折など口腔外科全般の診断と治療を口腔外科専門医が行います。
口腔がんの治療は、形成外科、放射線腫瘍科、腫瘍内科、耳鼻咽喉・頭頸部外科などの院内各科と連携を図り治療を提供しております。
顎変形症治療は、保険診療が適応され、歯科矯正と手術を併用して噛み合わせを治します。歯科インプラント(人工歯根)治療には学会認定の研修施設として力を入れております。
また、心臓病、糖尿病、腎臓病、血液疾患などの患者さんの抜歯は院内他科と連携し治療にあたっています。特にワーファリンなどの抗凝固薬、アスピリンなどの抗血小板薬による抗血栓療法中の患者さんの抜歯は薬を中止することなく行っており、安全のために入院して抜歯を行うこともあります。さらに、睡眠科と連携し、睡眠時無呼吸症の治療のために口腔内装置の作製と口腔機能低下症の診断と治療を行っております。
以上のように幅広い口腔疾患に対して、高い専門性と安全な医療を提供しております。

総合診療科
Department of General Medicine

自分たちでいろいろな病気を横断的に診ています。高度先進医療を提供しないことが多いですが、守備範囲の幅の広さが売りになっております。また他部門の医療や保健、福祉の部門の力を借りつつ皆様をケアします。場合によっては他の医療福祉施設などとの連携を配慮していきます。患者様の背景、そして家族や地域を診る視点も重視しています。
取り扱うおもな疾患は、他施設で診断がつかない、または多くの疾患がある、多臓器に係るような疾患に罹っていらっしゃる患者さんで、専門診療よりも当科がふさわしいと考えられる場合に診させていただいております。年齢や性別、臓器を問わず診療させていただいておりますが、高度で特殊な医療や治療は行えません。外来、そして必要があれば病棟で診療させていただきます。
学生や若い先生の教育に力を入れております。また診察においても皆様のご協力を仰ぐことも多々あるかもしれません。
皆様のニーズに合った医療を心掛けつつ、少子高齢化する未来の日本に合致した医療を模索したいと考えております。

リハビリテーション科
Department of Rehabilitation Medicine

各科からの依頼により、入院患者と外来患者さんに対して病気やケガにより生じた障害の治療を行っています。リハビリテーション科医、理学療法士(PT)、作業療法士(OT)、言語聴覚士(ST)のチーム医療で、機能障害や能力低下をできるだけ軽減し、患者さんが元の生活にできるだけ近い形で復帰できるように依頼科とも連絡をとりながら進めています。リハビリテーション科医師による診察・障害の評価の後、理学療法(筋力強化、基本動作訓練、歩行訓練など)、作業療法(上肢の機能訓練、日常生活動作訓練、認知機能訓練など)、言語療法、嚥下訓練などの治療、生活指導、家族への介助指導などを行っています。当院の特徴は急性期の患者さんに対してICUやベッドサイドよりリハビリテーションを開始していることです。また、神経や骨関節の病気だけでなく、循環器や呼吸器、がんなど多種にわたる病気に対して治療しています。重症の患者さんも多いため、リハビリテーション中のリスク管理には特に注意を払っています。

病理診断科
Department of Sueginal Pathology

病理診断科は以下の業務を通じ、女子医大病院の医療に貢献しています。

1. 組織診断:生検または手術によって採取される組織を肉眼および組織学的に検討し、診断を行います。年約11,000件。一部の症例では個別化医療のため、治療の法的となる分子の発現などを検討しています(コンパニオン診断)。ゲノム診療にも参画しています。
2. 細胞診断:喀痰、尿、甲状腺や乳腺腫瘍などから採取される細胞を検討し、疾患の推定診断を行います。年約8,000件。
3. 術中迅速診断:手術中に採取された組織や細胞から標本を作製、検体提出後15-20分のうちに診断を行います。年約1,000件。
4. 各診療科との症例検討会や研修医教育プログラムへの参画(特に全学臨床病理症例検討会の運営)。これらの業務を通じ、病理専門医、細胞診専門医、分子病理専門医、細胞診断士を育成します。また臨床病理学的研究を推進し、各診療科医師や初期研修医、学生などの学会、論文発表などの学術的発信を支援しています。
5. がん遺伝子パネル検査のための試料作製、データ解析のためのエキスパートパネルに参加しています。
6. 医学部基礎医学教室である人体病理学分野と協力して病理解剖を担当し、亡くなられた患者様の病態解明、治療効果の検討などに尽力しています。

腫瘍内科
Department of Medical Oncology

東京女子医科大学腫瘍内科は、がん（悪性腫瘍）の診断・治療・予防を専門とする「腫瘍内科学」に基づき、教育・研究・診療を三本柱として活動しています。
がん罹患者数の増加に伴い、がん治療は医療現場においてますます重要な課題となっており、当科では最新の知見と技術を取り入れた高度ながん医療の提供に努めています。
診療の特徴としてがん薬物療法（化学療法、免疫療法、分子標的療法など）や支持・緩和ケアを中心に、患者さん一人ひとりに最適な治療法を提案します。他診療科や多職種と連携し、チーム医療による総合的ながん治療を実践するとともにアドバンス・ケア・プランニング（ACP）の支援を行っています。東京女子医科大学病院として、がん治療の進歩に貢献するため、当科では新しい治療法の開発にも積極的に取り組む体制を整えています。新しい治療を臨床試験や治験として提供するとともに、産学連携による新規治療の創出、患者さんのニーズに応える個別化医療の推進など、未来のがん医療を切り拓くための準備を進めています。これにより、患者さんにより多くの治療選択肢を提供し、がん治療のさらなる発展に寄与してまいります。
がん治療は日々進歩し、治療法も複雑化しています。国内でもがん薬物療法を専門診療科・専門医が行うことが質および医療安全上の重要となっています。おかかりの病院や診療科で治療や生活等でお困りのことがあれば、どうぞお気軽にご相談ください。

睡眠科
Division of Comprehensive Sleep Medicine

当科の前身は、東京女子医大附属青山病院睡眠総合診療センターで、2010年より睡眠時無呼吸症候群を中心とした睡眠呼吸障害、むずむず脚症候群、レム睡眠行動障害、ナルコレプシーなどの過眠症、不眠症（入眠困難、中途覚醒、早朝覚醒）などの睡眠障害の検査、診断、治療を行ってまいりました。
近年、24時間社会、IT化がすすみ、また食の欧米化、運動不足などライフスタイルの変化により、不眠、睡眠覚醒概日リズム障害、睡眠時無呼吸症候群などの睡眠障害をきたす患者さんが増えています。睡眠障害は、事故やヒューマンエラーなど社会的問題、うつなどの気分障害、生活習慣病と密接に関係し、総合的、専門的に診断、治療していくことが重要です。当科では、睡眠医療、循環器内科の専門医が診療にあたり、精神科（向精神薬の調整など）、歯科口腔外科（口腔内装置作成など）、泌尿器科（夜間頻尿など）、耳鼻科（鼻閉感など）、神経内科（神経疾患の合併など）、呼吸器内科（慢性閉塞性肺疾患の合併など）、ゲノム診療科（遺伝性疾患の合併など）など多数の診療科と連携をとりあっています。
入院検査は、終夜睡眠ポリグラフィー検査、昼間の眠気を客観的に評価する反復睡眠潜時検査を施行します。閉塞性睡眠時無呼吸症候群では、持続陽圧呼吸療法の導入や口腔外科での口腔内装置による治療を行っています。入眠困難、中途覚醒、早期覚醒、睡眠薬の調整など睡眠に関する悩みがあればお気軽にご相談ください。
また高度肥満症（BMI：27以上）を伴う睡眠時無呼吸症候群への保険での減量治療（GLP-1受容体作動薬）も行っております。月～金曜日に初診を受けておりますが、完全予約制になっておりますので、初診・再診ともに当院予約センターまでご連絡ください。睡眠検査入院をご希望の場合も、まず初診外来で承ります。

予防医学科
Department of Preventive Medicine

予防医学科では会員制の健康診断プログラムを実践しています。大学病院ならではの最新の医療設備を駆使した質の高い検査を実施し、後日行われる生活指導との組み合わせで、数値のみの判断ではなく、全人的な健康診断結果を提供しております。
近年では、がん検診の効果を科学的な方法で評価したうえで実施するのが、国際標準となっております。当科では、厚生労働省の「がん予防重点健康教育及びがん検診実施のための指針」に定められた、がん死亡率の減少について、科学的根拠のあるがん健診を中心に、受診者の皆様のニーズに合わせプログラムを構築しております。また、健康診断の後に受けて頂く生活指導では、健康診断の結果をお伝えするだけではなく、生活習慣病進行予防を介し、動脈硬化性疾患発症、進展予防を目指しており、専門的かつ、きめ細かな指導を行っています。
健診により何らかの問題が見つかった場合は、当院の専門診療科にご紹介し、迅速な対応を受けることができるようお手伝いいたします。
我が国の疾病構造が変化してゆく中、さまざまな疾患やそれらの危険因子の疫学的動向を的確に把握し、最新の医療をもって受診される皆様のニーズにお答えできるよう、スタッフ一同一丸となって、予防医学を展開してまいります。

臨床検査科
Department of Clinical Laboratory

臨床検査は診療情報のひとつですが、その役割は増加しており、臨床検査なしで診療を行うことは不可能な環境になりつつあります。さらに、新規の検査項目の開発や検査技術の発展に伴い、臨床検査情報は高度化され膨大化しています。このような状況で、医師がより客観的な診療情報を得るために、どのような検査を行うか、どのような検査材料を採取するのか、また報告された結果をどのように判断し診察や治療に生かしていくかが肝要になります。
臨床検査科では、臨床検査専門医としての医学的見地から、中央検査部の検体検査室、採血・採尿検査室、心電図検査室、心臓超音波検査室、腹部超音波検査室、内視鏡検査室、呼吸機能検査室、脳波・筋電図検査室、病理検査室、遺伝子関連検査室、移植関連検査室、診療科支援検査室などの品質保証と精度管理を行っています。中央検査部は2010年にISO15189を取得しており、安全・正確・迅速に24時間体制で精度の高い迅速検査を提供できるよう、関連各科の医師、検査技師と日々協力しています。

移植管理科
Department of Organ Transplant Medicine

東京女子医科大学病院は、心臓、腎臓の臓器移植を行うことのできる臓器移植施行病院として日本臓器移植ネットワークに登録されており社会的にも非常に重要な役割を担っています。また、生体腎移植のような生体ドナーからの移植数においても全国有数の症例数を誇っており本邦における移植医療を担う中核的な施設となっています。これまでは室長(兼任)以下、各専門分野の移植コーディネーター4名およびドナーコーディネーター1名が各診療科に分散している形で運営されてきました。今後は臓器横断的に以下のような業務を移植管理科が中心になって取り組んでまいりたいと考えております。

①移植待機患者(日本臓器移植ネットワーク)の管理
②臓器移植患者のデータ報告
③移植前後における臓器移植検討会の開催
④普及啓発に関する業務(日本臓器移植ネットワークとの連携)
⑤臓器移植に関係する免疫学的検査の質の担保

集中治療科
Department of Intensive Care Medicine

集中治療室(ICU)は、病院内の施設の核となる部門の一つで、呼吸、循環、代謝その他の重篤な急性臓器不全の患者を24時間体制で管理し、より効果的な治療により回復させることを目的としています。集中治療科医が管理と診療チームのリーダーとなり、ICU看護師とともにICUベッド18床を運用し、各診療科の高度な治療をサポートしています。また、多職種チーム(医師、看護師、臨床工学技士、理学療法士、薬剤師、管理栄養士など)で治療計画を共有・協働し、幅広い年齢層と多彩な急性期病態の対応に努めています。当院は、難易度の高い手術や他の医療施設では対応できない複雑な疾患を合併する患者様の手術が多く、そのような患者様の術後を中心とした周術期管理や、院内で内科的治療中に併発した急性呼吸・循環不全や敗血症性ショックなどに対して、人工呼吸器管理、血液浄化療法、ECMOや機械的循環補助法など、高度な機械的生命維持装置を駆使して治療を行っています。さらに院内急変対応チーム(RRT)や呼吸ケアチーム(RST)を編成し、病院の医療安全に貢献しています。関連病院のみならず、他施設からも積極的に各診療科を通して患者様を受け入れておりますので、まずは該当診療科へご連絡ください。

循環器内科
Department of Cardiology

当科は、虚血性心血管疾患、不整脈、心筋症、心不全、弁膜症および大血管疾患など、循環器疾患全般の診断・治療を行っています。循環器領域の黎明期であった1967年にわが国で最初に創設された冠動脈集中治療室（CCU）では、現在は虚血性心疾患の治療にとどまらず、心臓移植を視野にいれた重症心不全の治療にも精力的に取り組んでいます。急性心筋梗塞や狭心症に対する心臓カテーテル治療・下肢を中心とした全身の血管に対してのカテーテル治療に加えて、心臓血管外科との緊密な連携のもと、手術困難な重症弁膜症に対するカテーテル治療（TAVI, MitraClip）も積極的に行っており、指導施設の１つとなっています。これら心血管カテーテル治療全体での症例数は2019年に年間1000例を超えるところとなりました。不整脈領域でも、頻脈性不整脈に対するカテーテルアブレーションは年間約400例、また心臓ペースメーカー・植込み型徐細動器（ICD）・重症心不全に対する心臓再同期療法機能付植込み型徐細動器を用いた治療も総計で約300例を数え、大学病院としてはトップクラスの症例数を誇ります。今後も、冠動脈疾患、末梢血管疾患、不整脈、心不全、弁膜症、大血管疾患、人工弁、先天性心疾患など、各分野のエキスパートによる専門外来とその相互の連携を円滑に行うことで、常に日本で最高の医療を提供し続けることを目指して、患者さまのための全人的医療に取り組んでまいります。

心臓血管外科
Department of Cardiovascular Surgery

当科は1949年に榊原 仟先生が東京女子医学専門学校へ赴任され、外科学講座を開かれたことに源を発し、2024年に開講75周年を迎えました。この間、榊原先生の手によって本邦初の心臓手術（動脈管開存結紮術）や開心術が行われるなど、日本における心臓血管外科の歴史はまさにこの女子医大から始まっております。多くの経験に基づく揺るぎない伝統は現在に至るまで引き継がれ、我々心臓血管外科教室の根幹を成しております。
当科では新生児から高齢者の方までのあらゆる心臓・大血管疾患に対して外科治療を行っております。患者さまにとって体の負担が少ない低侵襲治療の標準化を進めており、大血管に対する血管内治療（ステントグラフト）や経カテーテル的大動脈弁留置術（TAVI）、さらには最新のデバイスを用いた低侵襲心臓手術（MICS）での冠動脈バイパス術、縫合不要の人工弁（sutureless valve）を用いた弁膜症手術を導入しております。また、重症心不全の患者さまに対しては、植込み型補助人工心臓手術や心臓移植、さらに細胞シートを用いた再生治療など、本学ならではの高度先進医療を積極的に行っております。
各領域に高度な技術と経験を有する専門医を揃え、循環器内科、循環器小児科、麻酔科、集中治療科、看護部、臨床工学部と密接に連携し、良質で安全なチーム医療に取り組んでおります。スタッフ全員が患者さまに寄り添った医療を実践していくことをお約束致します。

循環器小児・成人先天性心疾患科
Department of Pediatric Cardiology

胎児、新生児、小児から成人までの先天性心疾患に対する診断、治療を行っています。また、小児の不整脈、成人の遺伝性不整脈、小児の心筋疾患、川崎病、肺高血圧症に対する最先端の診断、治療も行っています。胎児の心臓検診（胎児診断）や心疾患のある母胎の診療も行っています。小児と成人に対するカテーテル治療の数と治療成績は日本でも有数の施設のひとつとなっています。小児の不整脈や先天性心疾患に合併した小児や成人の不整脈に対するカテーテルアブレーションも良好な成績をあげています。心臓血管外科や循環器内科と密接に連携して、高度な、しかも安全な医療を提供しています。未熟児で先天性心疾患がある場合には、母子総合医療センター新生児部門（NICU）と協力して治療を行います。先天性心疾患成人で、妊娠されたご婦人の場合も母子総合医療センター母性部門と協力して、妊娠と分娩について適切な医療を提供します。外来は予約制を整備し、常に患者サービスの向上に努めています。

消化器内科
Department of Gastroenterology

消化器内科は、消化管（食道・胃・小腸・大腸）、肝臓、胆道／膵臓の疾患を担当しています。腫瘍・炎症・免疫・感染など様々な要因により発生する消化器疾患全般の診断・治療を、消化管・肝臓・胆道／膵臓の専門診療グループが対応しています。
消化管領域では近年増加している炎症性腸疾患（潰瘍性大腸炎・クローン病）の診療に注力し、消化器外科とも連携しながら、生物学的製剤・顆粒球吸着療法などの内科的治療を担当しています。また食道胃静脈瘤に対する内視鏡治療の経験も多く有しています。
肝臓領域では、脂肪性肝疾患・自己免疫性肝疾患の多くの診療経験に加えて、フォンタン術後などのうっ血性肝疾患の診療も行っているのが特徴です。
胆道・膵臓領域は、悪性腫瘍から良性疾患まで様々な病態に対して超音波内視鏡（EUS）や内視鏡的逆行性胆管膵管造影（ERCP）なども用いながら、正確な診断、適切な治療を消化器外科と連携しながら行います。胆道鏡・膵管鏡、EUS下ドレナージやバルーン内視鏡下ERCPなどの、専門的な内視鏡診療の経験も多く、様々な病状に対応可能です。胆道癌・膵臓癌では抗腫瘍療法に加えて、合併する閉塞性黄疸や十二指腸閉塞に対する内視鏡治療も行いながら診療しています。
消化器内科では、幅広い消化器疾患に対応するため、各領域の専門知識・技術を持ったスタッフが外来、入院の診療を担当し、また消化器外科、消化器内視鏡科と連携し、「患者さん中心の医療」の提供に努めています。

消化器・一般外科
Department of Digestive and General Surgery

消化管、肝胆膵の各チームが、それぞれ専門性の高い高度医療を提供しています。一方で消化器外科として全体で治療方針を決定するなど、常に全スタッフの協力の下で診療に当たっています。また手術治療は腹腔鏡やロボットによる低侵襲手術が多くを占めるようになり、在院日数の短縮化、医療資源の効率化を図っています。さらに当院では伝統的に消化器内科や化学療法科、放射線科と密に連携をとっており、患者さん第一の治療を行っています。
上部消化管疾患の内訳は、食道がん、胃がん、GISTなどの腫瘍性疾患のほか、逆流性食道炎や食道裂孔ヘルニアなどの良性疾患の手術治療にも対応しています。特に食道がんや胃がんに対するロボット手術を多くの症例に行っており、周術期の薬物治療や放射線治療と組み合わせて治療成績の向上に努めています。下部消化管疾患では、大腸がんが多くを占めますが、潰瘍性大腸炎やクローン病、大腸憩室炎などの炎症性腸疾患を含めてほとんどを腹腔鏡またはロボット手術で行っています。進行した直腸がんには術前治療として放射線治療や薬物治療を先行して手術を行うことで、治療成績の向上や安全な肛門温存手術に当たっています。炎症性腸疾患は内科治療の進歩もめざましく、内科と連携して必要に応じた外科手術を主に腹腔鏡手術で行っています。
肝胆膵疾患では、肝臓がん、膵臓がん、胆嚢・胆管がんなどの悪性疾患のほか、胆嚢炎、胆石症、膵・胆管合流異常などの良性疾患の治療も多数に行っています。急性胆嚢炎の緊急手術も数多く行っており豊富な経験の下に安全な治療体制ができています。なかでも近年特に増加傾向の膵臓がんは、内科と連携して早期がんの診断・治療に取り組んでおり、その治療の多くを腹腔鏡手術で行っています。
また研究分野では手術画像から人工知能AIによる手術支援、主に各種悪性腫瘍に関連する臨床研究などに取り組んでいます。

消化器内視鏡科
Department of Endoscopy

消化管（食道・胃・十二指腸）内視鏡検査は年間約9000件、大腸内視鏡検査は約5000件と多数行っています。当科は、消化管腫瘍に対する内視鏡診断と低侵襲内視鏡治療（ESD）を中心に診療を行っており、当科指導医は食道、胃、大腸全ての消化管ESDを非常に安全に行っており、その症例数は国内でもトップクラスを誇っています。また、拡大内視鏡も含めた内視鏡診断にも力をいれております。
早期胃がんで範囲診断が難しい患者様、他施設で内視鏡治療が困難と診断された大腸腫瘍の患者様もぜひ当院にご紹介いただけますと精密検査で適応をしっかり判断したうえでベストの治療を選択させていただきます。外来初診日から数えて、3週間以内に治療を行えるようにスケジュールを組み、患者様にご満足いただけるように努めております。
また、内科・外科およびメディカルスタッフと連携し、チーム医療を推進し、安全で質の高い内視鏡診療をモットーに診療にあたっております。

脳神経内科
Department of Neurology

脳神経内科は脳、脊髄、末梢神経、筋肉の病気を対象としています。症状としては頭痛、めまい、しびれ、歩行障害、ふるえ、物忘れ、言語障害、意識障害などがあり、主な病気には脳卒中、パーキンソン病、多発性硬化症、アルツハイマー病、筋萎縮性側索硬化症、末梢神経障害、てんかん、筋炎、脳炎、髄膜炎などがあります。東京女子医科大学の脳神経内科は、救急診療から慢性疾患管理まで、幅広い診療体制を整えております。脳卒中、神経心理、神経免疫、神経生理、末梢神経疾患などの研究グループは全国でもトップクラスの研究成果と診療実績を誇っており、オールラウンドな神経診療を特徴としています。脳神経外科と共に脳卒中集中治療室（SCU）を運営し、血栓溶解療法、血栓回収療法に取り組んでおり、脳卒中以外の病態でもシームレスな相互協力体制を構築し最善の診療を実践しています。脳梗塞の急性期治療、パーキンソン病の薬物治療、神経免疫疾患の疾患修飾薬、認知症の抗体医薬など、神経疾患の治療法の進歩はめざましく、これらの新規治療に積極的に取り組んでいます。このように脳神経内科の診療は非常に多様で、東京女子医科大学脳神経内科では多くの女性医師が活躍し、全国から若手医師が集まっています。それぞれが自らのスタイルに合った得意分野を磨くことで多様な力を集結し、アクティブな脳神経内科を目指しています。

脳神経外科
Department of Neurosurgery

脳神経外科では最新の診断治療機器と治療方法を導入し、全国有数の症例数の治療を行っています。小児から高齢者、脳腫瘍、脳血管障害、機能神経外科、小児脳神経外科、ガンマナイフ、脳血管内治療などの全ての領域で診療しています。各専門分野は非常に充実しており、迅速な対応と適格な治療を推進しています。脳腫瘍の治療では手術室にMRIを導入し手術の進行とともにMRI検査を行い、脳機能温存を図りながら最大限の摘出を行っています。また、脳動脈瘤、閉塞性脳血管疾患などに対しても血行再建術（Low flow bypass, High flow bypass, CEAなど）に独自の手術手技を導入し良好な結果を得ています。特にもやもや病に対しては新たなバイパス手術も開発しています。良性脳腫瘍に対しても術中モニタリングを駆使した摘出術により安全で確実な治療を実現しています。機能神経外科においてはジストニア、振戦、パーキンソン病などに対して最新治療を行っています。ガンマナイフ治療では脳腫瘍や脳動静脈奇形だけでなく、難治性疼痛、脳機能障害、てんかんなどにも応用を図っています。研究に関しては先端生命医科学研究所や基礎医学講座などとの連携を図り、再生医療、脳虚血の病態解明、悪性脳腫瘍の病態解明、各疾患の遺伝子的解明、良性脳腫瘍の境界領域の病理組織学的検討などを行っています。

腎臓内科
Department of Nephrology

当科は「患者さんとともに」を基本として日々の診療に励んでおります。診療内容は、腎炎・ネフローゼ症候群・腎不全などの腎疾患全般および膠原病や高血圧症の診断と治療です。とくに腎生検を積極的に実施して正確な診断と適切な治療を心掛け、多発性嚢胞腎など遺伝性疾患の新規治療も積極的に行っています。また、血液透析(HD)、腹膜透析(PD)、腎移植後管理を含めた腎代替療法全般にわたる診療を担当しています。かかりつけ医との病診連携を重視し、慢性腎臓病の早期段階から患者教育も含めた積極的な介入を行うことで重症化予防や合併症予防を心掛けています。また、透析施設との病診連携を通じて、新規透析導入および透析患者さんの合併症管理も数多く行っております。最近では移植後の腎障害の診断・治療も行っております。セカンドオピニオン外来を開設し、難治性疾患や治療方針の決定が困難なケースにも対応しています。

泌尿器科
Department of Urology

当科は腎臓がん・前立腺がん(前立腺腫瘍センター)、膀胱がん、腎盂がん、尿管がん、副腎腫瘍などの泌尿器科腫瘍、腎移植を主体とした腎不全医療、女性排尿障害センター、小児泌尿器疾患などの専門外来を中心に診療を行っています。泌尿器腫瘍の手術のほぼ全てはロボット支援手術を行なっており、年間約400例の手術を実施しております。低侵襲手術は患者さんの身体的負担を減らせるともに、入院期間短縮など医療経済的にも社会に貢献しております。さらに、腎癌に対するロボット支援腎部分切除術、前立腺癌に対する神経温存ロボット支援前立腺全摘に代表される機能温存手術も積極的に行なっております。また、ロボット支援手術については腫瘍関連のみならず、ロボット支援腎盂形成術、ロボット支援仙骨膣固定術などの良性疾患に対しても多くの実績があります。腫瘍関連については、手術のみならず抗がん剤治療、放射線治療も泌尿器科を中心に行なっております。抗がん剤治療については、多くの臨床治験を手がけており、適切な治療と知識を届けることを心がけております。また腎移植の10年生着率は90%を超えつつあります。泌尿器科チームとしては約150例腎移植を行っております。生体腎移植が中心となっておりますが、脳死下腎移植に対応できるよう、体制を整えております。またこれら専門外来だけでなく前立腺肥大症、尿路感染症などの泌尿器科全般にわたる診療も行っています。泌尿器科は安全で信頼される診療を提供できるよう、日々努めて参ります。

腎臓小児科
Department of Pediatric Nephrology

当科は、先天性腎尿路疾患から腎炎・ネフローゼ症候群、そして急性・慢性腎不全まであらゆる小児期腎泌尿器疾患を診療しています。小児腎臓病診療には、さまざまな職種の医療従事者が力を結集して対応するチーム医療が必要不可欠です。当科は、東京女子医大病院内の診療科(泌尿器科、腎臓内科、血液浄化療法科、小児外科、小児科、循環器小児科、新生児科など)や同病院内の種々の部門と緊密に連携できる環境に恵まれています。腎生検は年間約60〜80例(固有腎20〜30例、移植腎40〜50例)行っており、高度で専門的な小児腎臓病治療として、腹膜透析導入を2〜3例/年、維持血液透析導入を3〜5例/年、そして腎移植を15例/年程度施行しています。血液型不適合例や巣状分節性糸球体硬化症といった、特別な処置を要する腎移植についても豊富な経験を有しています。それとともに、小児腎臓病の新たな治療法の開発につながる基礎研究にも力を注いでおり、さらなる診療水準の向上に努めています。

血液浄化療法科
Department of Blood Purification

血液浄化療法は、血液中の有害な物質を除去する治療法です。末期腎不全に対して血液透析、血液濾過透析、腹膜透析があり、免疫異常や敗血症などに対して血漿交換や吸着療法などがあります。透析治療ベッド48床、1日2交代と大学病院に付属する透析室としては、国内でも有数です。当科はわが国の透析医療の黎明期から先駆的な役割を担ってきました。そのため、血液浄化療法全般の教育・研修施設としての機能も併せ持っています。透析の診療業績においては、年間外来約9000件、入院約7000件の透析を行っており、新規透析導入は年間約100名、血漿交換や吸着療法などの特殊治療を年間約1000件行っています。さらに、腎臓内科、泌尿器科、腎臓小児科、各科と協力して、保存期慢性腎臓病の診療から、移植、医用工学にもスペクトラムを広げており、視野の広い医師およびメディカルスタッフが集まり、さらにその育成に努めています。私たちはあらゆる血液浄化療法を用いた集学的医療を目指します。

糖尿病・代謝内科
Department of Diabetology and Metabolism

糖尿病は全身にさまざまな合併症をきたすことから、糖尿病・代謝内科の外来では、糖尿病一般外来に加え、糖尿病性腎症・末期腎不全、神経障害、肥満症・脂質異常症、妊娠、小児・ヤング糖尿病、高齢糖尿病などのサブスペシャリストが、それぞれの患者さんの合併症や病態に対応して診療しています。CGM(持続糖濃度測定)やSAP (sensor-augmented insulin pump)など様々な先進的な医療機器も扱っています。また、他職種とも協働することによって、チーム医療の先駆的な取り組みを行っております。多数の看護師、臨床検査技師、管理栄養士などのメディカルスタッフが日本糖尿病療養指導士認定機構が認定するCDEJ(日本糖尿病療養指導士)や、東京糖尿病療養指導士認定機構が認定する東京CDE(東京糖尿病療養指導士)の資格を有しており、患者さんのセルフケアを全力で支援しています。

高血圧・内分泌内科
Department of Hypertensive Disorders

内科学（第二）講座が担当していた内分泌疾患総合医療センター内分泌内科をルーツにする診療科です。体の恒常性を保つ調節機構（ホルモンを含む液性調節）に注目し、全身の内分泌臓器に関連する疾患の診療を行っています。具体的には、下垂体疾患（先端巨大症やクッシング病、プロラクチノーマ、下垂体機能低下症、中枢性尿崩症等）、甲状腺疾患（バセドウ病、橋本病等）、副甲状腺疾患（副甲状腺機能亢進／低下症等）、副腎疾患（原発性アルドステロン症、クッシング症候群、褐色細胞腫等）、性腺疾患（ターナー症候群、クラインフェルター症候群等）、高血圧、糖尿病、脂質異常症、高尿酸血症、骨粗鬆症、骨軟化症等の患者様が通院されています。
当科には、「内分泌代謝科（内科）専門医」、「甲状腺専門医」、「甲状腺超音波ガイド下穿刺診断専門医」、「糖尿病専門医」、「高血圧専門医」、「動脈硬化専門医」、「腎臓専門医」等を有する優秀なエキスパート医師達が全国から集まり、多種多様なニーズに対応して全身を隅々まで診療しています。
特筆すべき当科のモットーは 以下の通りです。
1：症状としての高血圧、糖尿病、脂質異常症を管理するのではなく、原因となる病気、病態を見つけて治します
2：結果としての動脈硬化を評価して、脳卒中や心筋梗塞等から遠ざけます
ホルモンを含む液性調節の異常は、特に複雑な病態を引き起こします。入院においては、前出の優秀なエキスパート医師達がスクラムを組んで、様々な専門医の視点から包括的に病態を捉え、万全な医療を提供しています。
また、当科は全身管理のオーガナイザーとして、関連する循環器内科、心療内科（精神神経科）、腎臓内科、糖尿病・代謝内科、内分泌外科、脳神経内科、脳神経外科等と協力し皆さんの健康長寿を実現することを目標としています。

内分泌内科
Department of Endocrinology

内分泌内科は、ホルモンを作る内分泌臓器の障害によりホルモン分泌の異常が起こった状態、そのホルモンが作用する標的臓器の異常によりホルモン作用の異常が起こった疾患を対象としています。主な疾患としては先端巨大症、クッシング病、プロラクチノーマ、下垂体機能低下症、尿崩症などの間脳下垂体疾患、バセドウ病、橋本病、甲状腺癌などの甲状腺疾患、原発性副甲状腺機能亢進症、骨粗鬆症などの副甲状腺・カルシウム代謝疾患、クッシング症候群、原発性アルドステロン症、褐色細胞腫、副腎癌、先天性副腎過形成などの副腎疾患、ターナー症候群などの性腺疾患、多発性内分泌腫瘍症などの遺伝疾患があります。これらの疾患に対して日本内分泌学会の診療ガイドライン作成に関わっている、また厚生労働省の間脳下垂体機能障害に関する調査研究班の班長、副腎ホルモンに関する調査研究班の班員である経験豊富なスタッフが診療を行います。また先進的な診断・治療にも取り組むと共に、個々の内分泌疾患患者さんの病状に合わせた診療（テーラーメード医療）を内分泌外科、脳神経外科、泌尿器科、糖尿病・代謝内科・眼科などの関連する診療科と協力して行っていきます。

内分泌外科
Department of Endocrine Surgery

安全第一の診療を心掛けております。
甲状腺や副甲状腺、副腎などホルモンを作る臓器の腫瘍やホルモン過剰症の診断と治療を専門としています。甲状腺がんの手術方針を決めるにはがんの進行度合いを見極めることが重要ですが、なるべく甲状腺のはたらきを温存する手術を提案しています。副甲状腺機能亢進症では摘出すべき病変の位置を正確に診断することにより完治を実現しています。副腎腫瘍に対しては腹腔鏡を使った、体に負担の少ない外科治療を基本としております。また、遺伝性疾患である多発性内分泌腫瘍症やまれな内分泌がん（甲状腺髄様がん、甲状腺未分化がん、副甲状腺がん、副腎がん、悪性褐色細胞腫）なども経験豊富なスタッフが診療にあたっております。内分泌領域の年間手術数は約200例です。

乳腺外科
Department of breast surgery

乳腺外科では乳癌の診断、治療を中心に全人的な医療の提供に努めています。
乳房温存療法では整容性に配慮した乳房温存術（オンコプラスティックサージャリー）を行っています。また乳房切除術が必要な場合は形成外科と連携をとりながら乳房再建術、ご希望のある場合には同時（一次一期）自家組織再建も可能です。
遺伝性乳癌卵巣癌症候群の乳癌患者さんに対しては、ゲノム診療科、婦人科、形成外科との連携のもと、リスク低減のための対側乳房切除術、卵巣卵管切除術を、画像診断学・核医学科との連携でMRIを併用した強化スクリーニングも実施可能です。周術期の化学療法に対しては脱毛予防のための頭皮冷却も行っております。脱毛や爪の変形などに対応するアピアランスケア外来も始めました。挙児希望の方には、婦人科と連携して妊孕性温存のために受精卵凍結や、不安の強い患者さんには乳癌看護認定看護師による身体的、心理的、社会的、スピリチュアルな多方面からのサポートを提供しています。非手術を希望される方で腫瘍サイズなどの条件を満たす場合には放射線腫瘍科との連携で重粒子線治療という選択枝も可能な場合があります。安全で信頼される乳癌診療の提供を念頭に日々邁進しています。

母子総合医療センター
Maternal and Perinatal Center

母体・胎児医学科
Maternal-Fetal Division

総合周産期母子医療センターの中で、一般産科診療とともにハイリスクの母体・胎児の管理が可能なMFICU（母体・胎児集中治療室）の分野を担当しています。重症例に対しては、関連各科と密接に連携しながら、内科的・外科的合併症を有する妊婦、前置胎盤などの産科合併症、また早産児出生・胎児異常が予想される分娩などあらゆる母体・胎児合併症に対応できる体制がとられています。全ての分娩において高い満足度が得られるよう、助産師を含めたスタッフが一致協力して、診察にあたっています。麻酔科と協力して無痛分娩の要望にもお応えしています。さらに、母乳哺育の推進や育児相談にも積極的に対応しています。

新生児医学科
Neonatal Division

周産期医療のなかで、新生児疾患の治療を受け持ちます。早産児をはじめ、出生時の適応障害を起こした児、母体合併症の影響を受けた児、先天異常を有する児などの治療に対応できる新生児集中治療室（NICU）が整備されています。当NICUは総合周産期母子医療センターに指定されています。また、高度専門医療施設として、院内出生児および院外からの紹介症例に、24時間対応しています。一方で、比較的リスクの低い新生児の生後の管理も行っています。新生児期は、人生のなかで一番不安定な時期であり、出生後の適応状態に問題がないかを確認し、無事に退院の日を迎えられるように全力を尽くしています。

呼吸器内科
Department of Medicine

近年の生活環境の変化や人口の高齢化に伴い、呼吸器疾患の患者数は増えています。当科では、気管支喘息、長引く咳（慢性咳嗽）、慢性閉塞性肺疾患（COPD）、肺がん、肺炎、間質性肺炎、サルコイドーシス、呼吸不全、睡眠時無呼吸症候群など、あらゆる呼吸器疾患の診断、治療を行っています。喘息患者には呼気中一酸化窒素濃度の測定、喘息日誌を用いた管理指導を行い、また、標準治療を行っても改善しない重症喘息に対しては、生物学的製剤の抗IgE抗体、抗IL-5抗体、抗IL-5受容体α抗体、抗IL-4受容体α抗体、抗TSLP抗体を用いた治療を100例以上に行っております。また、エコー下気管支鏡およびクライオ生検を本邦でも初期に導入しており、肺がんや間質性肺炎などびまん性肺疾患の診断率が向上し、肺がんに対しては呼吸器外科、放射線科、病理医と包括的診療を行っています。気道の綿毛の検査など、特殊な検査により原発性綿毛機能不全など稀な疾患の診断・治療にも実績があります。呼吸リハビリテーションなどを通じて予防医学・管理医学の充実を図り、在宅酸素療法や在宅医療など、地域医療連携を行っています。当科では、どの曜日に受診されても、各疾患の専門医がいる体制になっているのが特徴です。安心安全の医療を心がけ患者様に適切な治療を提供しています。

呼吸器外科
Department of Thoracic Surgery

肺がん、転移性肺腫瘍、縦隔腫瘍、気胸、膿胸、肺嚢胞、漏斗胸などの呼吸器外科的疾患全般について呼吸器内科と連携して手術、診療を行っています。
当科では、肺がん、縦隔腫瘍に対するロボット支援下手術を積極的に行っています。当科では2012年よりロボット手術をいち早く導入し、経験を蓄積してきました。ロボット手術が保険収載となった2018年4月以降、症例数は飛躍的に増加し、全国でトップの施設となっています。そして、手術の質が高く評価され、他施設の医師がロボット手術の見学を行う施設として認定されています。従来の胸腔鏡下手術においても、豊富な経験を生かして治療を行っています。早期肺がんや転移性肺腫瘍に対する区域切除では、症例毎に術前3Dモデルを構築し、ロボット手術ではさらに、遠赤外線を用い、区域間を同定し、安全で正確な手術を行っています。悪性疾患の治療では、患者さんの状態や病状に合わせ、縮小手術を選択する場合もありますが、局所進行病変に対しては、必要に応じて化学療法などを行ったのち手術を施行しています。また、肺がんなど悪性腫瘍には、集学的治療を積極的に行っています。また、腫瘍による中枢気道狭窄に対しては、気管支鏡下レーザー焼灼術、ステント挿入を行っています。当院は大学病院という特性上、様々な併存疾患を持つ患者さんが多くいらっしゃいますが、他科との連携を重視し、個々の患者さんに対して治療を安全に提供できる体制を整えています。

膠原病リウマチ内科
Department of Rheumatology

全身性エリテマトーデス、血管炎症候群、多発性筋炎・皮膚筋炎、全身性強皮症、抗リン脂質抗体症候群、ベーチェット病、成人発症スチル病、シェーグレン症候群などの膠原病、関節リウマチ、脊椎関節炎、痛風など関節炎疾患の診断と治療を行います。小児リウマチ科、整形外科（リウマチ）と連携し、患者さんのライフステージや関節機能に幅広く対応できる診療体制を整えています。これらの疾患のガイドライン作成には当科の医師が中心的な役割を担っており、分子標的治療を含む標準的な治療を踏まえつつ、個々の患者さんの状態にあった治療を行うことを心がけています。病棟では経験豊富なリウマチ専門医が医療チームを牽引し、先進的かつ高度な診療体制を提供しています。

整形外科（リウマチ）
Department of Orthopedic Surgery

整形外科（リウマチ）は整形外科リウマチ班の外来部門です。整形外科（リウマチ）では国内最大規模となる毎年約300例のリウマチ性疾患の関節外科手術を行っており、リウマチ性疾患により侵されるほとんどの関節を治療対象としています。以前から膝や股関節の人工関節を積極的に行っていますが、近年は特に足趾や手指といった小関節の手術が増えています。足の外科では最近の関節リウマチ治療の成績向上に合わせ、関節修復まで考慮した手術方法を採用しています。また患者さんのニーズを踏まえ、全国的にはまだ数少ない人工足関節置換術も積極的に行っています。手の外科では人工指節関節手術や人工肘関節手術などに積極的に取り組んでいます。薬物療法で免疫抑制剤やステロイドなどを使用する患者さんにも、豊富な経験をもとに安全な治療を行っています。

小児リウマチ科
Department of Pediatric Rheumatology

成人で発症するリウマチ性疾患（膠原病）の多くを小児も発症します。同じ病名でも成人とは病態が異なる場合があり、病名に"若年性"とつけられるものがあります。症状や治療の選択、今後の経過などが成人とは異なり、成長期ならではの配慮が必要となります。
小児リウマチ科では小児リウマチ性疾患・自己免疫性疾患（若年性特発性関節炎（JIA）、全身性エリテマトーデス（SLE）、若年性皮膚筋炎（JDM）、混合性結合組織病（MCTD）、ベーチェット病、シェーグレン症候群、抗リン脂質抗体症候群）、血管炎症候群（高安動脈炎、結節性多発動脈炎など）に加えて家族性地中海熱、クリオピリン関連周期熱症候群（CAPS）、TNF受容体関連周期性症候群（TRAPS）などの自己炎症疾患・周期性発熱症候群の診断と先進的な治療を展開しています。当施設ならではの成人科と一貫した体制下で、成人期に向けた移行支援にも取り組んでいます。
外来診療は小児科ではなく、リウマチ科でおこなっています。

ゲノム診療科
Institute of Medical Genetics

病院内の多くの診療科は対象となる臓器別に専門分野が分かれていますが、当科が対象とするのは、染色体や遺伝子、DNAなどを含むゲノムです。ゲノムが原因で発症する全ての疾患を対象としています。この20年余りで遺伝学的解析技術が飛躍的に進歩し、新たな遺伝学的疾患が多数発見されてきました。ゲノム検査の結果がもたらす特徴として、①生涯変化しないこと、②遺伝形式によっては血縁者と共有している可能性があること、③結果を用いて将来を予見することができること、などがあり、検査を受ける前にメリットとデメリットをよく理解し、ご自身で判断していただくことが重要です。そのためにわれわれが提供するのが遺伝カウンセリングです。出生前・着床前診断にも応用される可能性のある検査になりますので、当事者の方々に対する生命倫理的な配慮も行いながら、心理・社会的サポートを行っています。また、先天性疾患の治療法開発にもつながるような研究にも取り組んでいます。

女性センター
Women's Center

女性センターは、女性特有の器官や疾患、女性医師を希望する患者さん（女性）の診療を行う部門として平成30年5月に開設されました。いろいろな診療科の女性教授を主体としたスペシャリストの女性医師、メディカルスタッフにより、専門性の高い懇切丁寧な診療を行っています。乳がんの早期診断、治療、化学療法、緩和ケアをはじめとする乳腺疾患の診療、大腸がん及びその他の大腸・肛門疾患の診断、大腸内視鏡検査、シミ・いぼなどの美容治療、内科系疾患（ホルモン異常、呼吸器疾患、糖尿病、肥満症、脂質異常症、心臓病、認知症、頭痛、てんかん）、小児リウマチ性疾患、自己炎症疾患、働く女性の健康管理などの診察、遺伝学的検査の相談などを行っています。関連する各科と連携し、本学ならではの高度で心のこもった女性医療を推進しています。

救命救急センター
Critical Care and Emergency Medical Center

当センターは、厚生労働省の指定を受けた三次救命救急センターとして、重篤な救急患者さまを24時間365日体制で受け入れています。東京消防庁をはじめ、近隣県の消防機関や他医療機関から搬送される患者さまに対し、病気やけがの種類を問わず、常に迅速かつ的確な対応を行っております。主な対象は、心肺停止や多発外傷、重度のショック、多臓器不全、脳卒中など、生命に関わる緊急状態の患者さまです。当院は、高度な医療機器と各専門診療科が充実しており、救急科や集中治療科、外科、脳神経外科、整形外科などの医師が緊密に連携し、どのような急変にも対応できる体制を整えています。また、臨床工学技士や臨床検査技師などの専門スタッフも常駐し、急性血液浄化療法や体外循環（ECMO）、脳低温療法、高気圧酸素治療など、最先端の集中治療を提供しています。これにより、重症患者さまの救命だけでなく、その後の回復や社会復帰までを見据えた支援が可能となっています。ICU（集中治療室）での治療後には、専用の一般病床に移行し、継続的な治療・ケアを行うことで、一貫した医療を提供しています。さらに当センターは、災害派遣医療チーム（DMAT）にも所属しており、大規模災害や事故時にも地域医療の要として機能します。今後も、地域の皆さまに信頼される救命救急センターとして、安全・安心な医療を提供し続けてまいります。

がんセンター
Cancer Center

がんは2人に1人がかかる身近な病気になりましたが、多くの方が病名を告げられるとショックを受け、治療過程においても悩み揺れ動く気持ちを体験します。がんセンターでは、医師をはじめ看護師、薬剤師、放射線技師、管理栄養士、臨床心理士、リハビリテーション療法士、ソーシャルワーカー等が活動しております。診療科単位にこだわらず、横断的な組織として当センターの基本理念である「至誠と愛に基づく全人的ながん医療」の提供に努めております。医療の進歩から治療も多様化しており、がん診療に携わる診療科の医師だけではなく、メディカルスタッフが参加するキャンサーボードでは、患者さんの思いや意向を大切にしながら患者さん1人1人に寄り添った治療やケアについて検討しています。また、緩和ケアチームによる専門的な緩和ケアの提供や、がん相談支援センターでの相談対応の他、患者さんやご家族同士の語り合いの場として「カフェすまいる」を開催しております。また、新しくがんゲノム診療室を開室し、ゲノム医療に対する取り組みも行って参ります。がんと診断されたときから患者さんやご家族が少しでも安心して治療やケアが受けられるような体制づくりを目指しております。また、新たにがんゲノム診療室と小児がん支援室を開室し、がんゲノム医療や小児がん支援に対する取り組みも行ってまいります。

アレルギー総合医療センター
Allergy Medical Center

2019年2月に東京都のアレルギー専門病院に指定され、2020年2月にアレルギー総合医療センターが設立されました。アレルギー性鼻炎、花粉症、咳喘息、喘息、蕁麻疹、アトピー性皮膚炎、薬剤アレルギー、食物アレルギーの診断、治療を行います。アレルギー疾患は、内科、小児科、皮膚科、耳鼻咽喉科など多岐にわたるため、当センターでは、各科アレルギー専門医が協力して診察にあたり、横断的に診断や治療をしてまいります。アレルギーの診断に最も重要な免疫グロブリンIgEは、1966年に石坂公成、照子（女子医専の卒業生）夫妻により発見され、現在では、抗IgE抗体が慢性蕁麻疹や重症喘息の治療にも貢献しています。この抗IgE抗体を含め、生物学的製剤の加療を行っている患者さんは100例以上に及びます。また、アレルギー専門医、医療スタッフの育成、入院患者への高度な治療・教育の提供を行っております。アレルギー疾患の患者数は増加しており、医療現場のみならず学校や職場などでも対応や対策が重要視されています。最新の知識と技術を持った医師が対応し、安心、安全で、適切な診療を提供しています。

研究推進センター

Clinical and Academic Research Promotion center(CARP)

本学の研究活動を統括管理し、基礎研究と臨床研究の推進を目的として、研究推進センターは設置されました。
新しい治療法や薬が開発される時には、それがどのような病状の患者さんにどの程度役立つか、また、安全性に問題はないかなどを患者さんにご協力いただきながら確かめる臨床研究が行われます。その中でも新薬や新しい医療機器の製造承認を得るために行う試験のことを治験といいます。臨床研究は人を対象としていますので、法律や基準で患者さんの人権保護、記録などの保存などが定められています。また、治験審査委員会や各種の倫理委員会の承認を経て研究は行われています。
研究推進センター病院部門では、臨床研究（治験）に参加していただいた患者さんの権利・安全性を最優先として臨床研究を実施していくための支援・管理を行っております。治療法がなくて困っておられる患者さんへ少しでも早く良い治療法が届けられますよう、スタッフが一丸となって日々努めています。

看護部
Allergy Medical Center

看護部では、「2025年に向けた看護の挑戦、看護の将来ビジョン~いのち・暮らし・尊厳をまもり支える看護~寄せて」を基に患者さん、ご家族に看護の提供をしています。外来では、受診される患者さんご家族の受診目的が達成され、疾病とともにその人にあった生活ができるような支援やケアを提供しています。また、ICに同席し患者さんが検査、治療など理解できるように意思決定支援に努めています。入院病棟では、24時間365日最も身近な存在として、安全で安心できるような看護体制で対応しています。また、入退院支援センターを通じて外来と病棟の看護師が連携して入院前から退院後の患者さんとご家族の生活を見据え、「生きるを、ともに、つくる」ために地域を含む多職種と連携し、継続した看護ケアを行っています。限られた入院期間の中で、迅速に患者さん、ご家族のニーズを把握し、意思決定支援を行い、安心して地域に戻り生活できるように支援しています。さらに、看護の専門性を発揮できる専門看護師、認定看護師、診療看護師、エキスパートナースなど看護のスペシャリストをキーパーソンとして、患者さんとご家族にとって最善の医療、良質で安全な看護ができるように努めています。

薬剤部
Department of Pharmacy

薬剤部は、安全で質の高い薬物治療を提供できるようにさまざまな薬剤業務に取り組んでいます。特に外来では、入院する前に持ち込む持参薬を確認し安全に使えるように関わり、また、すべての病棟に薬剤師を配置し、入院時、入院中、退院時と関わり、適切な薬物治療が行えるように医師や看護師などと常に相談し薬物治療管理を行っています。薬剤部内の部門は、主に内服外用剤を調剤する調剤室、注射薬を調剤する物流管理室、抗がん剤などの注射剤を無菌的に調製混合する注射調製室、市販されていない特別な薬剤の調製を行う製剤室などの中央業務と、入院患者さんへの薬の説明や薬の適正使用を総合的に管理する臨床薬剤管理室に分かれています。また、感染、がん、緩和、栄養などの専門領域のチーム活動に参画しており、各部門が病院内の他の診療部門と連携を図ると共に、薬剤師が患者さんの身近な距離にいることで、日々患者さんの薬物治療の安全確保と最適化に努めています。

中央放射線部
Department of Radiological Services

中央放射線部は、高度な画像診断と放射線治療を行うために、多くの大型放射線関連機器を揃えた我が国有数の放射線診療部門です。
現在、画像診断のための関連機器は、320列MDCTを含む7台のCT装置、MRI装置は3Tを含む7台、PET/CT、SPECT/CT・SPECT合計5台、心臓カテーテルなどの経皮的に診断・治療を行う血管撮影装置は8台、他には乳がんの早期発見のためにトモシンセシスとステレオガイド下生検を搭載した乳腺撮影装置が稼働しています。
放射線治療については、高精度の強度変調放射線治療が可能なCT搭載のリニアックなど2台、腔内照射装置とガンマナイフ、8台を超える放射線治療計画装置が活躍しています。また2024年の病院機能評価ではS評価を取得しています。
近年急速に進歩する画像診断技術や放射線治療技術をいち早く取り入れて日常の先端医療に結びつけていくためには、中央放射線部の画像診断・放射線治療の専門医、診療放射線技師、医学物理士、専門看護師だけにとどまらず、各部門との連携が何より重要です。
あらゆる専門性を取り入れた“協同によるチーム医療”をモットーに、中央放射線部の診療体制を更に整えてまいります。

中央検査部
Department of Central Clinical Laboratory

中央検査部は心機能検査、超音波検査、脳波・節電図検査、呼吸機能検査および内視鏡検査などを行う生理検査部門と血液、尿などの体液や分泌物に含まれる生化学的成分、免疫血清学的成分および微生物、血液細胞、尿中細胞などの形態学的検査を行う検体検査部門及び採血部門で構成されています。当部は総合外来センターに位置し、患者さんが安心して検査を受けられるよう患者サービスに努めるとともに、各検査分野での認定資格の取得等に力を入れて専門性の高い技師育成に努め、より質の高い検査データの提供を行っています。さらに、検体検査においては診療前検査における検査項目を充実させ、迅速な検査結果の返信により、診療部門の診断・治療を遅延なく行うための重要な役割を担っております。検体検査室および生理検査室は、国際標準化機構の国際規格ISO15189を取得しています。

輸血・細胞プロセシング部
Department of Transfusion Medicine and Cell Processing

血液成分の不足があり、他に代替する治療法が無い場合に、足りなくなった血液成分を不足分だけ補うのが輸血療法です。当部では献血から製造される血液製剤を赤十字血液センターから取り寄せ、適切に管理すると共に、血液型・交差適合試験などの輸血検査を実施し、手術室・ICU・病棟・外来に供給する部門です。他の医療機関では薬剤部が取り扱うことの多い、アルブミン・免疫グロブリンなど、血漿成分から製造されるすべての血漿分画製剤の管理供給も行い、特定生物由来製剤全般について、適正使用や医療安全を推進しています。当部採血室では、当院で治療を受ける患者さんから手術に使用する自己血採血を行います。また、悪性腫瘍に対する造血細胞移植や免疫細胞療法を実施するための成分採血を行い、一部は細胞プロセシングセンター(CPC)で細胞成分の調製や活性化培養などを行います。さらに術中出血量抑制目的にクリオ製剤調製、輸血関連免疫学的副作用予防のために洗浄血小板調製、また難治性腹水に対する腹水濾過濃縮処理などの業務で診療を支援しています。その他、先天性溶血性貧血や赤芽球癆などの難治性稀少血液疾患診断のための特殊検査も実施しています。

臨床工学部
Department of Clinical Engineering

高度な医療を提供する当院は、多くの医療機器を使用しています。医療機器には、輸液ポンプ、シリンジポンプ、心電図モニタなどの多くの患者さんに使用される装置、ペースメーカー、人工呼吸器、透析装置、人工心肺装置、補助人工心臓、ECMO(体外式膜型人工肺)などの生命維持装置、そして電気メスからDa Vinci(医療ロボット)まで高度な手術支援機器など多岐にわたっています。臨床工学部は、それらの医療機器を患者さんがいつでも安全に安心して使用されるように、日頃から保守点検を行うとともに、医師、看護師などの多職種と連携し、チームの一員としてそれらを操作する業務を担っています。現在、45名の臨床工学技士が在籍し、手術室、集中治療室、心臓カテーテル室、透析室、ME機器管理室などの領域で高度な診療支援を行なっています。

栄養管理部
Nutrition Support Unit

栄養管理部では、安全安心で病態・症状に応じた美味しいお食事の提供を心がけています。
入院中のお食事が楽しい時間になるよう、行事食なども積極的に行っております。
栄養は治療の土台にもなるため、管理栄養士は、チーム医療の一員として、入院前から医師や看護師、メディカルスタッフなど多職種と連携し栄養スクリーニングを行い、患者個々に栄養計画を立てニーズにあった栄養管理を実施しております。
また、疾患と食習慣の関わりは強いものが多く、適正な食事療法を修得できるように栄養指導を行っております。
『食べること』を大切に考え、適切な栄養管理を支援すべく、日々、新しい専門知識の習得に務めています。

医療連携・入退院支援部
Social Support Department

地域連携室
当院と地域の医療機関やかかりつけ医の先生方との連携窓口として、外来診療やセカンドオピニオン外来の予約、診療情報提供書などの発送業務を担当しています。また、連携登録医の先生方の連絡窓口及び情報発信を行っています。

入退院支援室
外来・入院の患者さんが望む生活ができるように入退院支援専任看護師が相談窓口となり院内外の医師、看護師、ケアマネージャーなどの医療介護福祉関係者と連携をとりながら支援を行っています。

医療福祉相談室
傷病によって生じる社会生活上の様々な問題に対し、ソーシャルワーカーがご相談にのっています。社会保障制度や地域のサービスに紹介し、地域関係機関と連携を行いながら、患者さんやご家族にとって安心できる療養環境や社会生活を共に考えサポートいたします。

ベッドコントロール室
ベッドコントロール室では、病床を効果的に運用するために管理と調整を行っています。予定入院だけでなく、緊急入院や転院を必要とする患者さんの受け入れを速やかに進めています。ベッドを効率よく稼働できるように、入退院情報を把握します。また、出来るだけ患者さんのご希望に添えるように差額ベッドの調整をしています。

クリニカルパス推進室
クリニカルパスを活用し、チーム医療の推進を行い良質で標準的な医療の提供に取り組んでいます。また、患者さんやご家族のために検査や治療の入院経過が分かりやすいよう患者用パスの作成を支援しています。各診療科や入退院支援室と連携し、患者さんと臨床現場の支援を行っています。

医療安全推進部
Department of Patient Safety Management

医療安全推進部門は2017年９月に役割・機能を拡充させるために、「医療安全対策室」から「医療安全推進部」に昇格しました。また、「安全対策」からもう一歩進めて「安全推進」という取り組みを強化するために、名称も現在のように「推進部」へ変更しております。当院は、医療安全に関する大きな課題を背負っており、他の病院より一段も二段も高いレベルでの取り組みが求められています。そのため、2016年には「医療安全科」を新たに創設し医療安全を担当する専従医師を確保し、また専従の薬剤師も配置して、多職種で構成される部門として機能強化を図っています。現在では、医師２名、薬剤師１名、看護師３名、臨床工学技士１名、事務職員３名の計10名の専従職員で構成されています。
インシデント・アクシデント報告システムにより、再発防止策を検討・実施と共に、チーム医療の推進に向けた研修会などを企画し、院内各部署の協力を得て「安全文化の醸成」に努めています。また、当院ではハイリスク症例、高難度新規医療技術症例などが多く、手術や治療に対して患者に関わる職種の専門家が一堂に会し検討を行い、医療安全に力を注いでいます。2019年12月からは、「医療対話推進室」も併設し、患者・家族との信頼関係を基盤として安全・安心な医療の提供を支援できる体制にしております。

総合感染症・感染制御部
Department of General infectious Diseases Infection Control

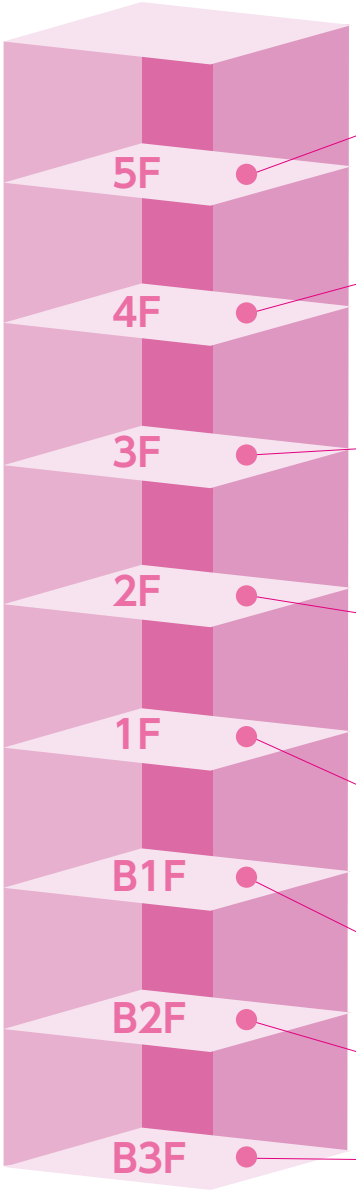
総合感染症・感染制御部は、感染症診療と院内感染対策を行う部門です。病院長直轄のもと、科学的根拠に基づいた院内感染対策が確実かつ継続的に実践され、患者さんに安全で質の高い医療が提供できるよう、多職種で協働できる体制を整えております。専従の感染症科医師と感染管理認定看護師を中心に薬剤師、臨床検査技師など各職種の代表者で構成する感染対策チームメンバーと感染対策リンクドクター・リンクナースが連携し実践しています。
活動内容は感染症の診断および治療・予防、感染制御に関するコンサルテーションや介入、抗菌薬適正使用の推進、医療関連感染サーベイランスの実施、手指衛生の遵守、感染対策の実践支援、薬剤耐性菌対策の早期発見と介入、マニュアルの整備と見直し、職業感染対策の充実、職員教育など多岐にわたり、患者さんが安心して診療を受けられるための感染対策活動を行っております。

からだ情報館
Patient's Library

「からだ情報館」は、病気や治療に関する様々な情報を調べることができる場所です。医学書やパンフレット、検索用パソコンをご用意しております。また、併設する“がんサロンすまいる”では、がんの治療やそれに伴う暮らしに関連する情報をお知らせしています。

外来案内 令和7年6月現在

総合外来センター



- 特別診察室
- トータルヘルスケア・予防医学センター

- 産婦人科
- 母子総合医療センター
- 高血圧・内分泌内科
- 内分泌外科
- 乳腺外科
- 女性科
- 血液内科
- 麻酔科
- 放射線腫瘍科
- 耳鼻咽喉科
- 歯科口腔外科
- 皮膚科
- 睡眠科

- 腎臓内科
- 泌尿器科
- 腎臓小児科
- 血液浄化療法科
- 糖尿病・代謝内科
- 眼科
- 形成外科
- 画像診断・核医学科
- レストラン
- ゲノム診療科

- 消化器内科
- 消化器・一般外科
- 消化器内視鏡科
- 内分泌内科
- 循環器内科
- 心臓血管外科
- 循環器小児・成人先天性心疾患科
- 脳神経内科
- 脳神経外科
- 呼吸器内科
- 呼吸器外科
- ゲノム診療科

- 総合診療科
- 小児外科
- 整形外科
- 小児科
- ペインクリニック
- 会計
- 膠原病リウマチ内科
- 整形外科(リウマチ)
- 小児リウマチ科
- からだ情報館
- 総合受付
- 入退院支援センター
- 売店

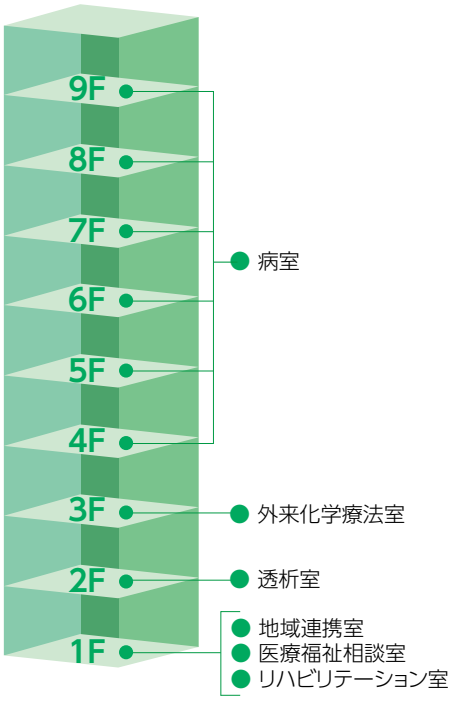
- 核医学・PET 検査室
- 放射線検査室
- 検体検査室

- 医療記録管理室

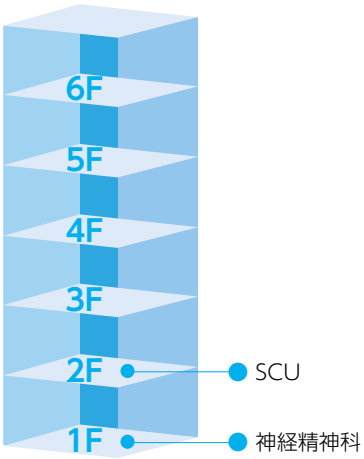
- 放射線治療室

病棟案内 令和7年6月現在

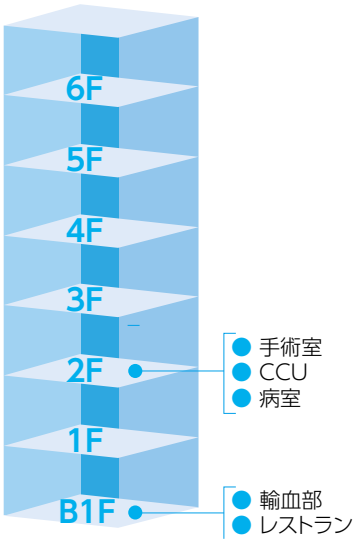
第1病棟



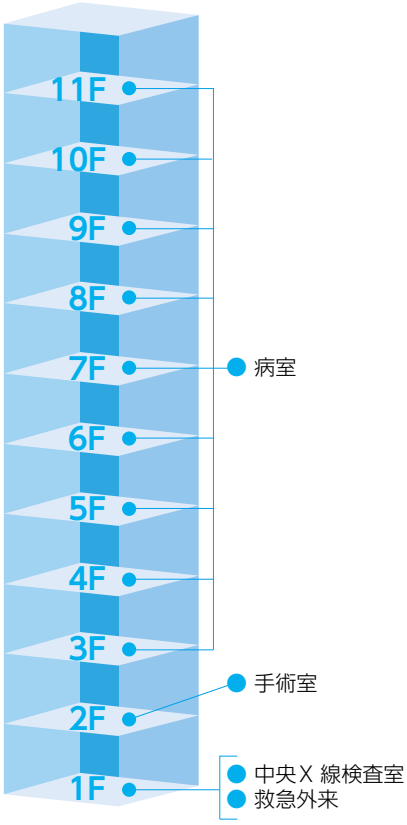
西病棟A



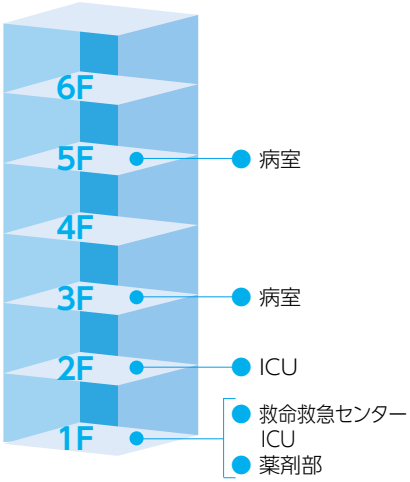
西病棟B



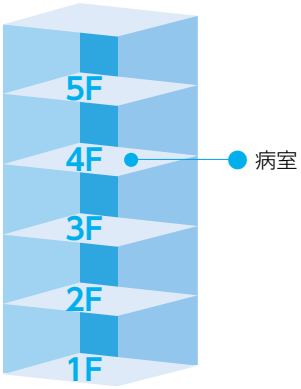
中央病棟



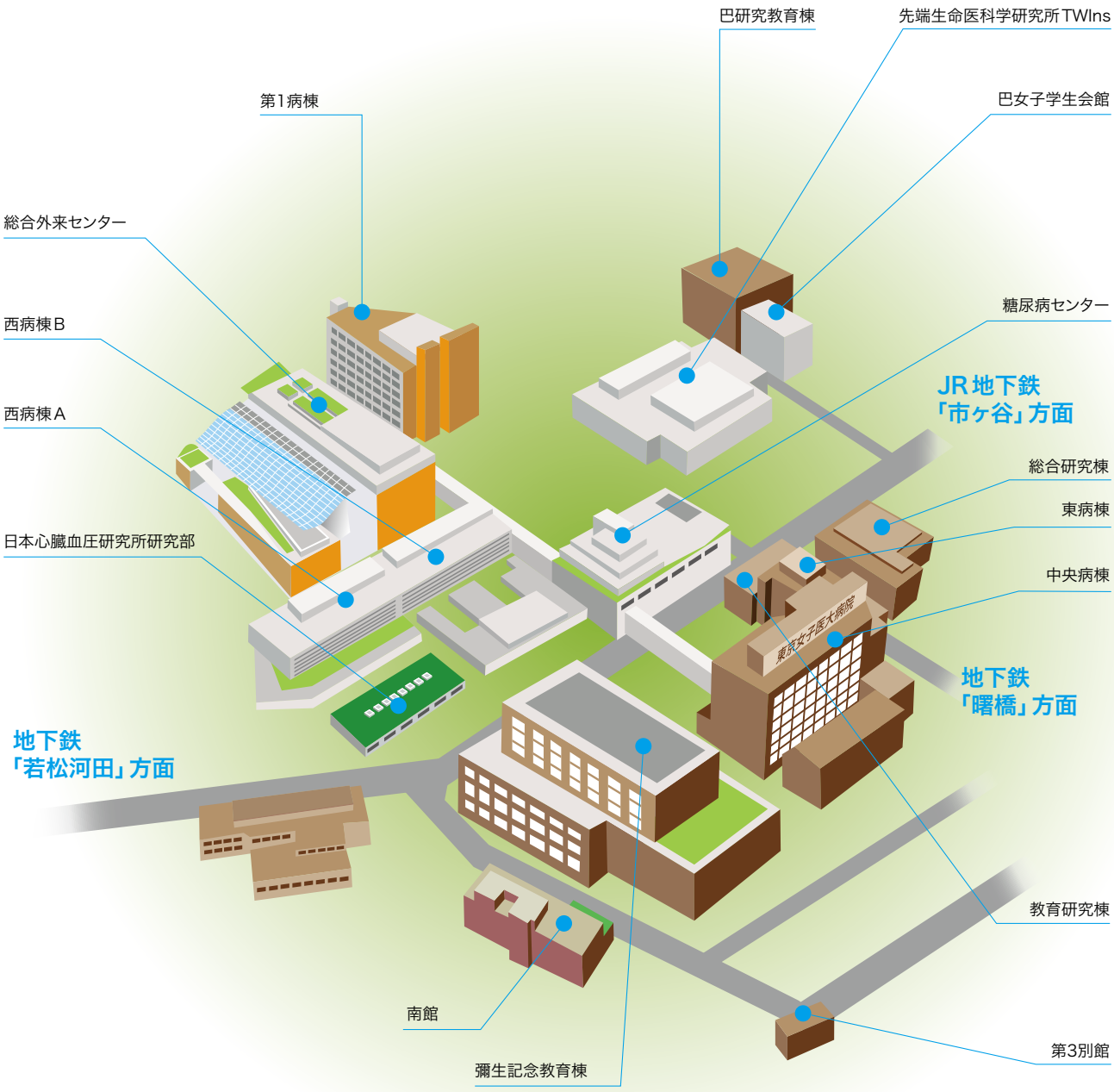
東病棟



糖尿病センター



構内見取図



東京女子医科大学附属施設

●附属足立医療センター
〒123-8558 足立区江北4-33-1
Tel:03-3857-0111

●附属八千代医療センター
〒276-8524 千葉県八千代市
大和田新田477-96
Tel:047-450-6000

●附属東洋医学研究所
〒162-8666 新宿区河田町8-1
南館1階
Tel:03-6709-9021

ご案内図

◎地下鉄

都営大江戸線	❷若松河田駅下車（若松口より徒歩約5分）
	❸牛込柳町駅下車（西口より徒歩約5分）
都営新宿線	❹曙橋駅下車（A2出口より徒歩約8分）

◎都営バス

宿74系統	❶新宿駅西口→東京女子医大前
宿75系統	❶新宿駅西口→東京女子医大前←❽四谷駅前←三宅坂
早81系統	早大正門→❺馬場下町（早稲田駅）→東京女子医大前←❻四谷三丁目←千駄ヶ谷駅前←原宿駅前←渋谷駅東口
高71系統	❼高田馬場駅前→東京女子医大前←❾市ヶ谷駅前←九段下

東京女子医科大学病院

〒162-8666 東京都新宿区河田町8-1　Tel : 03-3353-8111（代表）